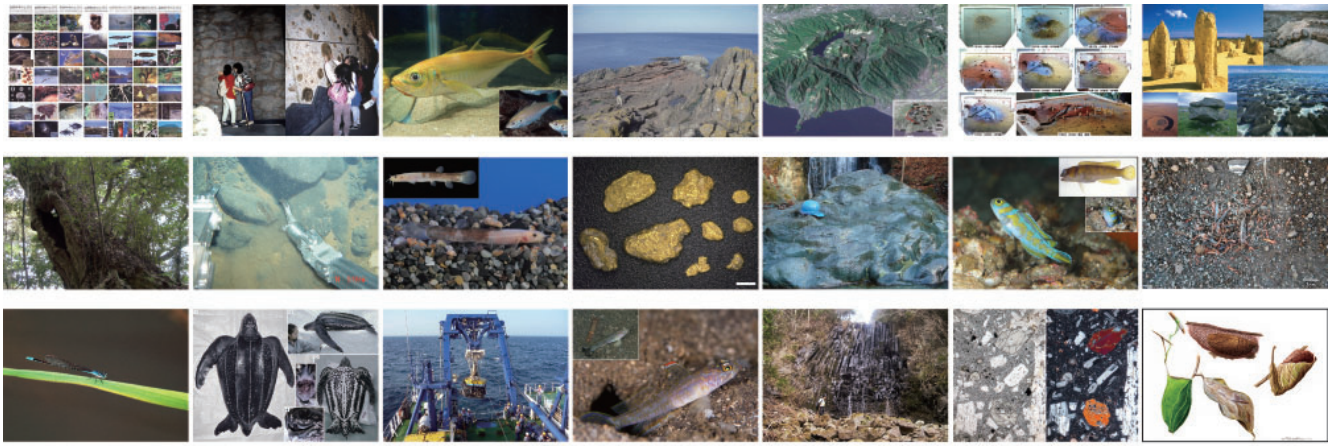
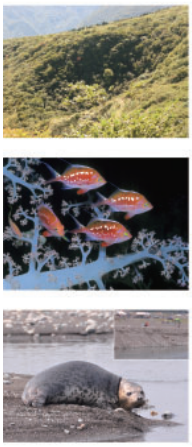
2020 年 9 月 15 日発行　年 4 回発行　通巻 100 号　PRINT ISSN 1341-545X　ONLINE ISSN 2189-5023

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 26, No. 3　神奈川県立生命の星・地球博物館　Sept. 2020

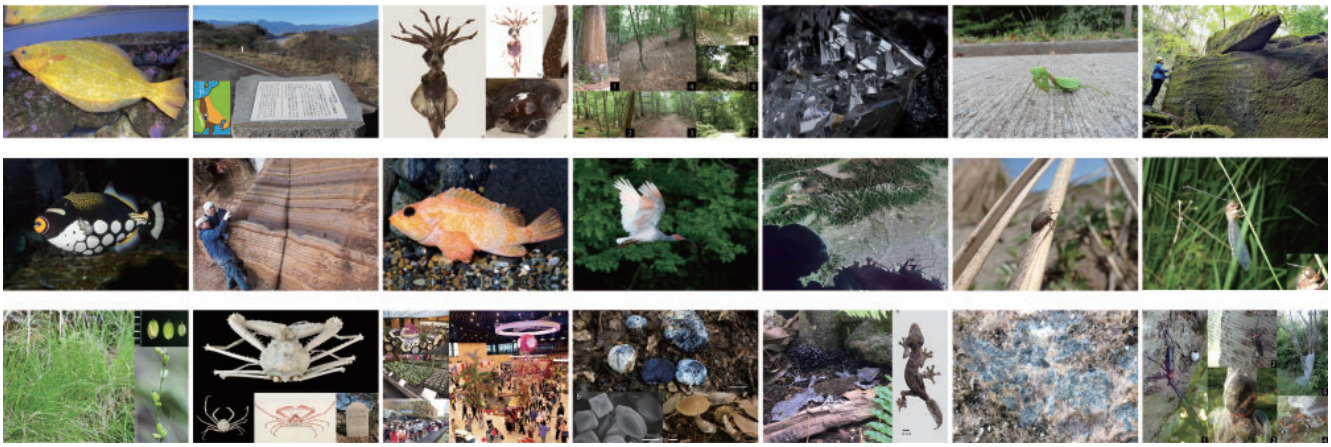




おかげさまで通巻100号

今号は通巻100号記念の特別号として、当館館長と歴代の編集者6人が筆をとった特別編成でお送りします。巻末に51～99号までの総タイトルもまとめて再掲載しています。普段と違う特別な『自然科学のとびら』をぜひお楽しみください。

写真：自然科学のとびら 50 号～ 99 号表紙（左上の 50 号から横に順番に、右下が 99 号）



たくさんの自然科学のとびら

平田 大二(館長)

通巻100号を迎えて

当館の普及広報誌である本誌「自然科学のとびら」が、本号で通巻100号を迎えました。当館の開館は1995年3月、その年の6月に第1号を発行して以来、25年間にわたり毎年発行を積み重ねてきた結果です。

当館の基本的活動は、自然科学に関する資料を収集し、整理・保管して次の世代に引き継ぐこと=「集める」、資料を基にした調査・研究結果を博物館活動の原動力とすること=「調べる」、生涯学習や学校教育の支援ならびに社会的貢献を行い、人々の心に地球の自然に対する愛着と感動を呼び起こすこと=「伝える」です。この「伝える」活動で情報発信の一翼を担っているのが本誌です。

本誌の内容は、表紙の写真・解説から始まり、展示紹介（常設展、特別展、企画展）、普及活動、研究活動、資料紹介、博物館の運営と評価、ボランティア活動、友の会活動、調査フィールド紹介、自然環境保全、絶滅危惧種、自然科学史など多岐(たき)にわたり、その時々のトピック的な記事を掲載してきました。執筆者は、主に当館学芸員と司書ですが、博物館ボランティア、外来研究員、外部研究者、他館学芸員などの方々にも協力していただきました。濱田隆士初代館長は第1号の記事「発刊にあたって」の中で、「新しい館のさまざまな表情をお伝えし、できるだけ多くの方々に近代総合自然博物館の進む方向をご理解いただけるよう、楽しい情報を満載・発信していきたい」と記していますが、まさしくその通りに続けることで自然と博物館を理解することができるたくさんの情報を提供してきました。各号は当館ウェブサイトで閲覧できますので、是非ご覧ください。

自然科学のとびら・一覧 URL: http://nh.kanagawa-museum.jp/research/tobira/

25年の時の流れ

多くの博物館・美術館が普及広報誌を発行しています。当館でも普及広報誌を発行するために、その準備を開館前の開設準備室時代から進めていました。

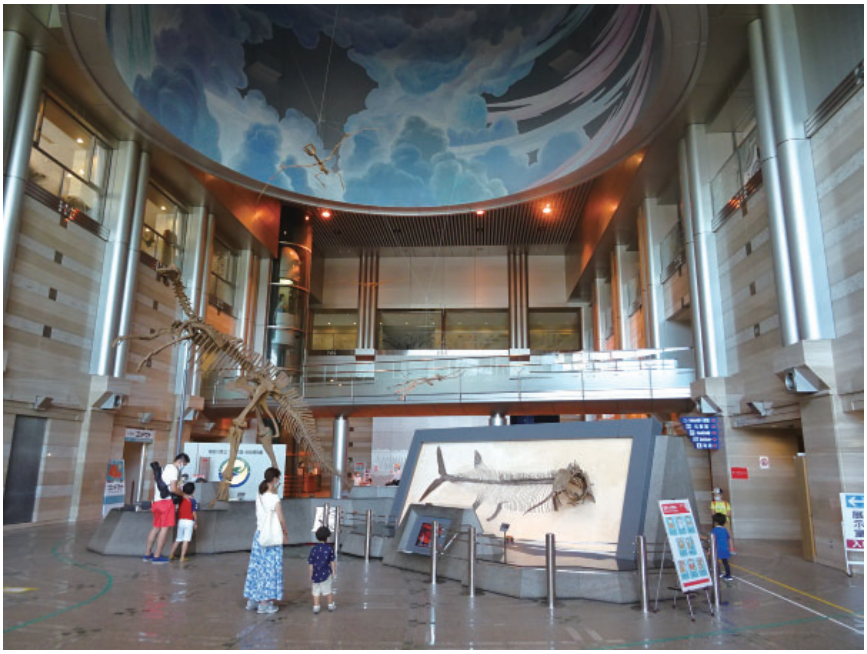


図. 全館新型コロナウイルス感染症予防対策実施中の当館エントランスホール（2020年8月）. 博物館そのものが自然へのとびらの一つ. 多くの人がそのとびらを開け, 自然と博物館を楽しんでくれることを願う.

普及広報誌の誌名や性格は、博物館の存在意義と各種活動とも深くかかわります。自然に関する資料を集め、研究して、公開していく博物館、そして人々が自然を理解するために信用できる、頼れる博物館の普及広報誌としてふさわしい誌名は何か。内容をどうするか、誰が書くのか、読者対象をどうするか、どこに配布するかなどについても検討を重ねた結果、誌名は「自然科学のとびら」となりました。

そして、この25年の間に本誌を取り巻く状況も様々な変化がありました。開館からしばらくの時期は、当館の広報手段は紙媒体でした。本誌も印刷予算の都合により印刷部数や配布方法、配布先を限らざるを得なかったため、読者も限られた状況が続いていました。その後、インターネット環境が整備され本誌はウェブページでの掲載も可能となって状況が大きく変化しました。現在は、誰もがいつでも見て読むことができます。

どこにでもある自然のとびら

自然界は多様です。宇宙があって、地球があって、そして生き物がいます。わかったこともたくさんありますが、まだまだわかっていないことや知らないこともたくさんあります。わからないこと、知らないことを調べたい、理解したいという知的好奇心は大切です。本誌がそのきっかけになれば幸いです。自然の中には、無数の見えないとびらがありますが、しかしそれらのとびらを開けるためのそれぞれの視点が必要です。野外観察や標本観察などのマクロな視点、顕微鏡や分析機器などを使うミクロの視点、書籍や論文など文字や写真・図などから情報を得る視点などです。博物館自体も自然のとびらの一つです。学芸員はそれらのとびらを開けるための視点と情報を提供しています。一つひとつ順番に開けては調べて、理解を進めていきます。そこから科学が始まります。これまで知らなかったことに気づき、理解できた時の楽しさは格別です。とびらの向こう側にある世界を体験してみませんか。皆さんと一緒にさまざまな自然のとびらを発見し、そのとびらを開け続けることができればと願います。当館は自然科学に関する“もの”と“こと”を集め、調べ、記録し、伝えていきます。今後も、本誌「自然科学のとびら」をお楽しみいただければ幸いです。

共通Q&A

歴代編集者6名に「Q1. 思い入れのある、またはお気に入りの記事」「Q2. 編集担当をしていた中で、もっともピンチだと思った瞬間」「Q3. 今後の博物館における刊行物の役割や意義とは？」の3問をお聞きしました。

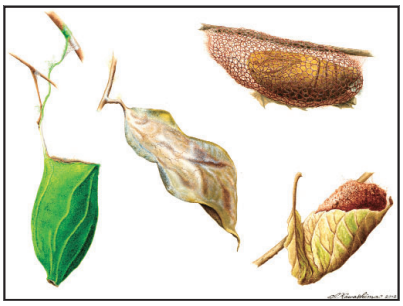
山下 浩之（学芸員）

編集担当期間　通巻 1号（1995年6月発行）～ 5号（1996年5月発行）
通巻61号（2010年6月発行）～72号（2013年3月発行）

地学分野、岩石担当の学芸員の山下浩之です。メガムリオンと呼ばれる特異な海底地形から採集した岩石、特に斑れい岩類の成因を研究しています。これとは別に、人文系の学芸員と連携して、石材の研究や普及事業も行っています。

A1.　思い入れのある記事の紹介の前に、実は私は本誌の第1号の編集担当だったのです。25年前、手探り状態で自然科学のとびらのレイアウトを行ったのを懐かしく思います。しかし、今回はあえて別の記事を紹介させてもらいます。お気に入りの記事は、通巻70号（2012年9月）の川島逸郎さんの記事です。川島逸郎さんは生物画家で、当時非常勤学芸員として勤務されておりました。自然科学のとびらは、表紙の写真が美しいことが特徴の一つであると思いますが、本号では、川島さんが描かれた蛾の繭の標本画が表紙を飾りました（標本画の詳細は通巻63号参照）。しかし、編集担当として表紙を作成する場合、写真ならば色の調整もなんとなくわかるのですが、カラーの標本画となると色の調整がよくわかりません。また、この時は4つの標本画が別々に送られてきたのですが、これらを1つの枠の中に収めて調整するのも苦労しました。苦労しましたが、お気に入りとなりました。

A2.　ピンチを感じたのも同じ巻号の川島さんの記事です。自然科学のとびらの原稿の文字数は決まっており、通常学芸員は文字を多めに書いてくることが多く、編集、校正の段階で文字を減らしたり写真を縮小したりして調整します。通巻70号では、表紙と同時に中びらきのカラー原稿も川島さんでした。しかし、送られてきた原稿を編集すると、写真が多いわりに文字数が極めて少なく唖然としました。もはや編集ではどうにもならない？と思いましたが、紹介すべき6種類のハチを、それぞれ枠で囲って図鑑形式でまとめていくことで何とかしのぎました。



図．通巻70号で表紙を飾った川島逸郎さんの「繭」の標本画．

A3.　自然科学のとびらは、デジタル版となったおかげですべてのページがカラーになりました。文字が多くて丁寧な解説は魅力的ですが、カラー写真を多く取り入れたビジュアルなページをもっと増やせればと思います。このような紙面を通して、自然科学の魅力を皆様にお伝えできればと思います。

佐藤 武宏（学芸員）

編集担当期間　通巻6号（1996年8月発行）～16号（1999年3月発行）

無脊椎動物を担当しています。カニ、貝やイカ、ウニやヒトデなどの資料を管理し、イソギンチャクやクラゲなどの質問にも対応することもあります。博物館に入るまでは館員が印刷物の編集やレイアウトをしているとは知りませんでしたが、やってみれば意外に性に合っていたのか15年以上にわたって毎年何かしらの印刷物の作成を担当しました。今は広報や普及と学校連携を受け持つ課の取りまとめをしています。

A1.　新採用として着任した出川洋介学芸員（現・筑波大学准教授）に、自己紹介を兼ねて自分の研究内容を紹介する記事を、通巻14号（1998年9月）に書いてくれるようお願いをしました。すると彼は二つ返事で快諾し「不思議なカビの恋愛事情について書きますよ！」と言うのです。「不思議」と「カビ」と「恋愛事情」という単語の繋がりがまったく予想外だったので驚愕しました。しかし受け取った原稿を読むと、この「不思議なカビの恋愛事情」こそ彼の研究を一言で言い表した秀逸な表現だったことに驚嘆しました。今までいろいろな科学エッセイを読む機会がありましたが、これ以上にインパクトがあり、読者を捕らえ、記事の内容を端的に表現し、その背景である研究世界を示唆するタイトルは今でもそう見当たらないなと感服しています。

A2.　「参ったなあ」と思ったのは、通巻12号（1998年3月）に掲載された『ラブカ』の記事に関するものです。有名ながら謎多き深海魚ラブカを、迫力ある写真を用いて瀬能 宏学芸員が解説した出色の記事でした。今でこそラブカの画像はネット上でも沢山見ることができますが、当時一般向けに鮮明な写真で紹介した記事はほとんどなかったように思います。事件は掲載直後。「オレはサメが嫌いなんだ。イヤなものを掲載するな。おかげでメシが不味くなった」というクレーム（言いがかり？）の電話を頂戴したのです。ラブカも瀬能学芸員も濡れ衣です。電話口で謝りながら「飯時に読まなきゃいいじゃんかよ……」と心の中でぼやいた覚えがあります。

A3.　子どもたちが博物館と関わるきっかけは展示でしょう。そして、広報誌や友の会、ボランティア、学芸員への質問などを通じてその関係はだんだん深まっていきます。そこで、執筆や編集の時にはいつも「自然科学に興味のある、ちょっと背伸びをした中学生が読めるような」という、この広報誌のコンセプトを強く意識しています。紙がデジタルに変わっても、そしてこの先も自然科学のとびらが次世代を担う若者たちにとって「自然科学」の世界に飛び込む「とびら」であってほしいと願っています。

共通Q&A

歴代編集者6名に「Q1. 思い入れのある、またはお気に入りの記事」「Q2. 編集担当をしていた中で、もっともピンチだと思った瞬間」「Q3. 今後の博物館における刊行物の役割や意義とは？」の3問をお聞きしました。

田口（たぐち） 公則（きみのり）（学芸員）

編集担当期間　通巻17号（1999年6月発行）～28号（2002年3月発行）
通巻83号（2016年6月発行）～86号（2017年3月発行）

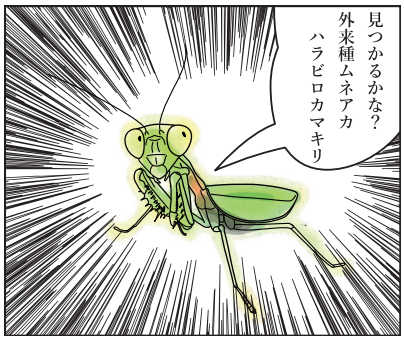
私のバックグラウンドは地質学です。地質図づくり（地表踏査（とうさ））から貝化石の仕事に入りました。地図へのプロット作業、いうなれば対象物の定位（ていい）に関心があります。資料・史料を残すという行為もその延長です。自然科学のとびらは、記事を定位するフィールドと言えそうです。

A1.　スゴイと思った記事は、通巻84号の表紙を飾った「ムネアカハラビロカマキリ」です。学芸員の苅部さんから投稿の話を受けたとき、その写真を一目見て即採用と決めたほどです。外来種のスクープだったことと、写真があまりにも大迫力、まるで漫画でいうところの「集中線」が入っているようなインパクトを受けたからです（図）。

表紙効果も手伝ってか、掲載後には地域のカマキリ情報が多数寄せられたそうです。タイムリーな情報を載せた自然科学のとびらの面目躍如（めんもくやくじょ）といったところでしょう。

A2.　担当時、緩（ゆる）やかな原稿募集により原稿不足となり、その穴を自分で埋めることも度々でした。編集をしながら内容を自分で調整できることは利点なのですが、締切前はピンチとなります。通巻85号に企画展「石展2」の関連記事を載せた時、表紙には企画展ポスターを撮影した際の現場写真が使えると考えていました。いざ写真を割り付けてみるとどういうわけかぱっとしません。巨石の大きさを伝えたいのに、大きさのわかるものが写り込んでいないのです。でも、格好いい写真が欲しい気持ちとなり、急いで現場に向かい再撮影。自分がスケールとなり写り込むことにしました。セルフタイマー撮影で何度も走り、すっかり息が上がってしまいました。手を抜かずに再撮影したことで巨石の大きさがわかる写真となりました。

A3.　自然科学のとびらの誌面には、ある程度自由な形式での記事が載ります。



図．集中線の効果による大迫力の表紙写真のイメージ．

科学論文のような縛（しば）りはないからです。この緩やかさのおかげで、自然科学のとびらには執筆者の人となりや心意気等が表れてきている文章が多いと思います。このことは読者にとって、誌面を通して博物館の学芸員と通じ合う機会になっているものと期待します。これは言わば「学芸員との対話」の提供です。刊行物の多様な展開の一つに対話メディアの役がありそうです。

苅部（かるべ） 治紀（はるき）（学芸員）

編集担当期間　通巻29号（2002年6月発行）～33号（2003年6月発行）

昆虫担当学芸員の苅部です。2002年の通巻29号から2003年の通巻33号まで1年間編集を担当しました。担当期間が短かったからなのか、実はこの依頼を受けるまで、自分がかつて編集担当をやっていたことを完全に忘れていました。しかし、もう20年近く前になるのですね。東日本大震災、今年の新型コロナと、社会を揺るがす自然災害を含む激動の時代に入っていくとは思ってもいなかったです。

A1.　この企画を頂いて、改めて担当した号を読み返しました。読んでみて印象に残ったのは、逝去（せいきょ）された先輩学芸員たちの記事。元気で活躍されていた頃を思い出します。ちなみに、オッサンだったはずの彼らの当時の年齢を自分はもう超えているのを知ると、時の流れの速さに驚かされます。また、依頼した原稿の編集者と執筆者の関係だった川上和人さん（当時は全く面識がなかった。今をときめくバード川上）と、後年、小笠原の調査で深く関わることになるとは、想像もしなかったですね。やはりこの世界は狭い。若かった自分も今よりは真面目に生きていた記憶があるので、外来種問題など、世間に一生懸命課題を伝えようとしている様子が伝わるのも微笑ましいです。

A2.　編集ソフトを使ったことがなかったはずなので、初めての割付作業をした時は苦労したと思いますが、終わったことは楽しかった記憶になってしまうので、特にピンチだったことの印象は残ってないです。

A3.　今後、本誌に限らず、印刷物の発行形態は、紙から電子媒体へ急速に変化していくのでしょうが、学芸員を含む博物館と読者の皆さんをつなぐ役割は変わらないと思います。改めて読み返すと情報としては古くなった内容もあるにせよ、内容も多岐にわたり、面白い雑誌だなーと自画自賛。皆さんもこの機会にぜひ100号読み返してみては？

今後も多様な話題を提供できるよう、我々学芸員も研鑽（けんさん）を続けます。電子化が進んでいけば、予算的な制限もなくなっていくので、ページ数も多様な号が編集できるかも？？

図．通巻30号（2002年9月）の表紙．

※通巻45号（2006年6月発行）～48号（2007年3月発行）　編集担当：木場（こば） 英久（現・桜美林大学教授）
　通巻87号（2017年6月発行）～　編集担当：本杉 弥生（企画普及課）

大島（おおしま） 光春（みつはる）（学芸員）

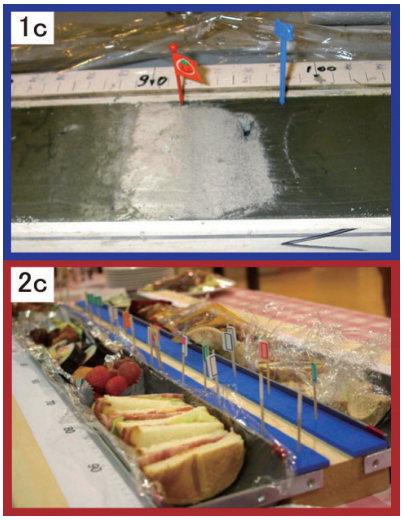
編集担当期間　通巻34号（2003年9月発行）～44号（2006年3月発行）
通巻73号（2013年6月発行）～82号（2016年3月発行）

古生物学を担当しており、イノシシやクジラ、トガリネズミ（モグラに近縁）の仲間などを研究し、展示では恐竜などを担当しています。十数年ほど前からは子どものための展示をはじめ、展示手法や展示解説手法など「伝える術」の研究にも取り組んでいます。

A1.　「博物館で、研究者なりきり体験～海洋コアを食べよう～」石浜佐栄子 通巻74号 23～24ページ

海洋コアの実物から必要なサンプルを採取することを「食べる」と表現します。本当に食べると（たぶん）おなかを壊します。でも、海底から採取した大切なサンプルからほしい部分を申告し、分け合ってみんなの満足を作り出す過程は、この記事になったイベント（私も食べるコアを運んでいます）で伝わったと思います。

「なりきり」は一見ばかばかしく見えますが、そのものの本質へと踏み込む最初の一歩になることを意図しています。そして、楽しみながら大まじめに考える。その根底にあるのはサイエンスの楽しさと、それを伝えたい学芸員の気持ちなのです。



図．通巻74号掲載の図4 目印の小旗を立てて.

A2.　紙面に穴が開くことが最大のピンチと思われるかもしれませんが、それだけではありません。ピンチというか、大きな出来事としては、大幅な予算削減がありました。博物館では開館当初からほぼすべての印刷物を編集ソフトで制作し、印刷・製本（「とびら」は製本しませんが）を外注していました。それ故、予算を削られると緩衝（かんしょう）できる余地はなく、即、印刷不可能になります。2014年と2015年がどちらも3号しかないのはそのためです。2014年度の予算が前年の半額になったために2014年9月と2015年の3月に発行するはずだった号が抜けています。ご存じでしたか？ それ以降「とびら」は電子出版へ移行していきます。

A3.　電子出版となったので、印刷のことは忘れてデジタルの可能性を追求していくようなニュースレターになるのかなぁと思っています。たとえばハリー・ポッターの映画に出てくる新聞のような、写真（3D映像）になり、飛び出す、動くような出版物（？）になると楽しいですね。

石浜（いしはま） 佐栄子（さえこ）（学芸員）

編集担当期間　通巻49号（2007年6月発行）～60号（2010年3月発行）

専門は地質学・堆積学で、地層のはぎ取り標本や砂の標本を集めたり、地層に残された証拠から大地の歴史を調べたりしています。

A1.　編集担当となって2号目に、節目となる通巻50号を迎えました。「せっかくだし、何かやってみたら？」という周囲の声に押され、過去49号分の表紙写真を並べた表紙をレイアウトしてみたり、当時館内で進行していたホットな話題について館長や学芸員に執筆してもらったりして、記念特集号を編集しました。ライブラリー横のミニ企画展示コーナーで、50号分すべての冊子を並べて展示したことも印象的でした（図）。通巻1号と2号は、保存してある在庫がなくて「誰か余部を持っていませんか～」と大捜索した記憶があります。

図．通巻50号記念展示（ライブラリー横）.

これに味をしめて、2008年には特別展「箱根火山」にちなんで、箱根に関する特集を組んでみたり（54号）、「メイキング・オブ・『箱根火山展』」を3号連続で執筆してもらったりしました（52～54号）。企画を立てて、各学芸員のところに「こんな内容の記事を、○月○日までに書いてください！」と突撃依頼に行くのですが、意外と皆さん二つ返事で引き受けてくれて助かりました。

A2.　秘密ですが、一部の冊子の印刷発注を連絡し損ねていたことが一度ありました。色々な方のご尽力により、どうにか事なき？を得ましたが。もう時効ということで。

A3.　自然科学のとびらは、最も博物館らしくて、読んで楽しい刊行物だと思います。最新の研究の情報あり、特別展や企画展に関する記事あり…博物館で今起きていることを分かりやすく、しかもちょっとした「知りたい！」欲求を満たす程度のしっかりした文章量で紹介しています。専門家による信頼ある記事ですから、専門用語でインターネット検索した時にヒットすることも結構あります。

近年、予算削減により冊子体の印刷ができなくなり、学校などに配布することができなくなってしまったのは大変に残念でしたが、当館ウェブサイトではすべてのバックナンバーがご覧いただけます。学芸員の「伝えたい！」と、みなさんの「知りたい！」が出会う場所、それが博物館の刊行物の役割であり、自然科学のとびらの存在意義だと思います。これまでも、これからも。

自然科学のとびら 51～100号 総タイトル

50号記念号では、それまでに発行されたタイトルをまとめて再掲載しました。今号では、その続きの51号以降のタイトルを再掲載します。これまでに掲載してきた記事で、改めて気になるものはありますか？

バックナンバーは、当館ウェブサイトにすべて掲載しているほか、当館2階のライブラリーや神奈川県内の中学校・高校・図書館などでも閲覧することが可能です。

博物館活動を知り、自然科学の分野に興味を持つきっかけとなれば幸いです。

Vol.13, No.4 通巻51号（2007年12月15日発行）
・表紙「ハンズ・オン展示」（奥野 花代子）
・「初声町三戸地区の谷戸の重要性」（瀬能 宏）
・「『誰にもやさしい博物館』への取り組み ～“ユニバーサル・ミュージアム”を目指して～」（奥野 花代子）
・ライブラリー通信「自由のたびびと」（篠崎 淑子）
・「南米パタゴニアの火山」（平田 大二）

Vol.14, No.1 通巻52号（2008年3月15日発行）
・表紙「黄金色のマアジ」
（新江ノ島水族館 崎山 直夫・当館学芸員 瀬能 宏）
・「穴開き貝殻の穴の不思議 ～穴の位置はなぜ同じ？～」（佐藤 武宏）
・「私の昆虫人生を振り返って」（高桑 正敏）
・展示シリーズ20「アカネズミ」（山口 佳秀）
・ライブラリー通信「楽しい図録」（篠崎 淑子）
・「メイキング・オブ・『箱根火山』展（1）～資料収集編～」（笠間 友博）

Vol.14, No.2 通巻53号（2008年6月15日発行）
・表紙「悠久なる時間の発見～ハットンの不整合～」（平田 大二）
・「さえずり上手は雌にモテモテ！ 鳥の鳴き声の秘密」（加藤 ゆき）
・「近代地質学の父、ジェームス・ハットンの足跡を訪ねて」（平田 大二）
・「博物館や自然をもっと身近に！ ～11コースのミニ観察会「学芸員とおさんぽ」」（石浜 佐栄子）
・ライブラリー通信「海を泳ぐゾウの写真集」（篠崎 淑子）
・「メイキング・オブ・『箱根火山』展（2）～展示準備編～」（大島 光春）

Vol.14, No.3 通巻54号（2008年9月15日発行）
・表紙「宇宙から見た箱根（衛星画像を使った鳥瞰図：宙瞰図）」（新井田 秀一）
・「箱根を越えた西洋の博物学者 -箱根の自然史研究のはじまり-」（勝山 輝男）
・「境界線上で翻弄される箱根の魚たち」（瀬能 宏）
・「箱根の「けもの」」（広谷 浩子）
・「箱根の植物」（田中 徳久）
・「箱根の昆虫」（苅部 治紀）
・ライブラリー通信「カワセミに逢う」（篠崎 淑子）
・「メイキング・オブ・『箱根火山』展（3）～展示趣向編～」（山下 浩之）

Vol.14, No.4 通巻55号（2008年12月15日発行）
・表紙「廃油と砂で作った箱根火山」（山下 浩之）
・「学芸員は博物館をつかう」（大島 光春）
・「ネパールの地質」（石浜 佐栄子）
・「アサリの“真珠”」（佐藤 武宏）
・ライブラリー通信「オホーツク海のアザラシ」（篠崎 淑子）
・「タヌキの遺体から考える」（樽 創）

Vol.15, No.1 通巻56号（2009年3月15日発行）
・表紙「地質写真家がとらえた地球の姿－46億年 地球のしごと－」（写真：地質写真家 白尾 元理，文：平田 大二）
・「穴開き貝殻の穴の不思議～穴の位置はなぜ違う？～」（佐藤 武宏）
・「丹沢の谷に大きなアナサンゴモドキ（ミレポラ）群体化石発見」（外来研究員 門田 真人）
・ライブラリー通信「高桑正敏の解体虫書」（篠崎 淑子）
・「地質写真家と博物館のコラボレーション 企画展『46億年 地球のしごと～地質写真家が見た世界の地形～』」（平田 大二）

Vol.15, No.2 通巻57号（2009年6月15日発行）
・表紙「フクロウのすむ樹洞」（加藤 ゆき）
・「『玉砂舞楼（たまさぶろう）』をつくろう」（石浜 佐栄子）
・「樹洞探しの旅 －特別展『木の洞（うろ）をのぞいてみたら』に寄せて」（広谷 浩子）
・「木の立場から樹洞を考える」（勝山 輝男）
・ライブラリー通信「大英博物館」（大澤 澄子）
・「樹洞と虫たち －珍品たちのすみかー」（苅部 治紀）

Vol.15, No.3 通巻58号（2009年9月15日発行）
・表紙「『しんかい6500』から見た海底」（山下 浩之）
・「ワークショップ“貝殻みがき”を研く」（田口 公則）
・「『しんかい6500』潜航記」（山下 浩之）
・ライブラリー通信「ぞうきばやし・おみやにいったらむしがいる」（尾越 佐緒里）
・「子どものための展示を考える」（大島 光春）

Vol.15, No.4 通巻59号（2009年12月15日発行）
・表紙「『東海ナガレ』の色彩変異個体」
（山梨県立吉田高等学校 丸山 琢也，
山梨県立甲府東高等学校 奥山 誠一，
山梨大学教育人間科学部 宮崎 淳一）
・「箱根火山6万6千年前の大噴火と謎」（笠間 友博）
・「丹沢の夜の野生動物 －センサーカメラが写しだした生態－」（外来研究員 若代 彰路）
・ライブラリー通信「チリモン」（大澤 澄子）
・「古瀬義氏 植物標本コレクション」（田中 徳久）

Vol.16, No.1 通巻60号（2010年3月15日発行）
・表紙「丹沢の砂金」（石浜 佐栄子）
・「サブ活動が支える子ども講座 －人類進化講座11年のまとめから－」（広谷 浩子）
・「悩ましいボウズハゼ類の色」
（（株）環境科学研究所 荒尾 一樹，神奈川県内水面試験場 山本 裕康，当館学芸員 瀬能 宏）
・「台湾大学での“協議合作備忘録簽約儀式”報告」（田中 徳久）
・ライブラリー通信「日本産クモ類」（尾越 佐緒里）
・「『パンニング』で砂を調べる」（石浜 佐栄子）

Vol.16, No.2 通巻61号（2010年6月15日発行）
・表紙「枕状溶岩の新産地
約1700万年前に海底を割って湧き出したマグマ」（外来研究員 門田 真人）
・「カナダガン捕獲大作戦」（加藤 ゆき）
・「日本列島20億年 謎解きの旅」（平田 大二）
・「大磯層のサイの臼歯化石」（樽 創）
・ライブラリー通信「うんち」（大澤 澄子）
・「丹沢山地の枕状溶岩」（外来研究員 門田 真人）

Vol.16, No.3 通巻62号（2010年9月15日発行）
・表紙「アゴアマダイ」
（当館学芸員 瀬能 宏・静岡県伊東市 高瀬 歩）
・「標本づくりのプロっているの？－いるんです、標本士です」（標本士 相川 稔）
・「神奈川のコウモリを調べる」（外来研究員 山口 喜盛）
・ライブラリー通信「日本列島20億年 その生い立ちを探る」（小林 瑞穂）
・「生物多様性研究の必要性と博物館の活動」（大西 亘）

Vol.16, No.4 通巻63号（2010年12月15日発行）
・表紙「魚とエビの集積～そこに化石が存在する理由を知るために～」（田口 公則）
・「私たちはなぜ集めるのか？ 哺乳類標本の紹介から」（広谷 浩子）
・「標本画～その伝えるものとは～」（生物画家 川島 逸郎）
・ライブラリー通信「鎌倉のクリハラリス（タイワンリス）」（大澤 澄子）
・「日本最初の植物同好会、横浜植物会の果たした役割」（田中 徳久）

Vol.17, No.1 通巻64号（2011年3月15日発行）
・表紙「ホソミイトトンボ －分布拡大の最前線－」（苅部 治紀）
・「傾斜量図 ～白黒で地形を表現する工夫～」（新井田 秀一）
・「伊豆諸島青ヶ島の自然」（勝山 輝男）
・追悼 濱田隆士元館長
・「カニの脚」（佐藤 武宏）

Vol.17, No.2 通巻65号（2011年6月15日発行）
・表紙「オサガメ」（樽 創）
・「菌類の戸籍簿をつくる ～ボランティアとの協働による『入生田菌類誌』～」（大坪 奏）
・「水中の虫たちのふしぎな世界」（苅部 治紀）
・ライブラリー通信「野山の鳴く虫図鑑」（小林 瑞穂）
・「さまざまな海岸環境と海岸に生える植物」（大西 亘）

Vol.17, No.3 通巻66号（2011年9月15日発行）
・表紙「相模湾に潜る ～JAMSTECの広報航海～」（大島 光春）
・「箱根二子山の形成と謎」（笠間 友博）
・「南へ北へ！ 旅をする鳥たち」（加藤 ゆき）
・「たまには海の上」（大島 光春）
・ライブラリー通信「大英自然史博物館の人々」（大澤 澄子）
・「東京湾のスナメリ」（樽 創）

Vol.17, No.4 通巻67号（2011年12月15日発行）
・表紙「ホオベニオトヒメハゼ」
（静岡県三島市 御宿 昭彦・当館学芸員 瀬能 宏）
・「箱根火山と考古学 ～溶岩がつなぐ研究の輪～」（山下 浩之）
・「魅力ある箱根ジオパークをめざして」（平田 大二）
・「植物の重複標本という考え方」（田中 徳久）
・ライブラリー通信「ずら～りカエルならべてみると…」（小林 瑞穂）
・「特別展『およげ！ ゲンゴロウくん』を振り返って」（苅部 治紀）

Vol.18, No.1 通巻68号（2012年3月15日発行）
・表紙「箱根火山外輪山溶岩の柱状節理」（笠間 友博）
・「バリア体験実習から見えてきたこと」（広谷 浩子）
・「きのこの形のふしぎ －地下生菌への進化－」（折原 貴道）
・ライブラリー通信「北九州高校 魚部」（大澤 澄子）
・「神奈川県の昆虫相調査をふりかえって ～その驚くべき多様性と地域性～」（高桑 正敏）

Vol.18, No.2 通巻69号（2012年6月15日発行）
・表紙「箱根火山外輪山溶岩（安山岩）の偏光顕微鏡写真」（山下 浩之）
・「秦野の天然砥石『戸川砥』から人の営みと自然の営みを見つめる」（田口 公則）
・「トンボの世界」（苅部 治紀）
・「花を見てみよう」（大西 亘）

Vol.18, No.3 通巻70号（2012年9月15日発行）
・表紙「糸の造型『繭』」（川島 逸郎）
・「地球を調べる船の旅」（石浜 佐栄子）
・「海辺に生きるハチたちのくらし」（川島 逸郎）
・「箱根火山と地震」
（神奈川県温泉地学研究所 行竹 洋平）

Vol.18, No.4 通巻71号（2012年12月15日発行）
・表紙「神山山腹の奇妙な地形 知られざる噴火の形跡？」（勝山 輝男・山下 浩之）
・「鳥類標本はどのように作られるのか」（加藤 ゆき）
・「ツキノワグマ出没の理由を探る」（小坂井 千夏）
・ライブラリー通信「虫のいい噺」（坂井 陽子）
・「箱根火山と温泉」
（神奈川県温泉地学研究所 菊川 城司）

Vol.19, No.1 通巻72号（2013年3月15日発行）
・表紙「植物・昆虫の標本画像データベース構築をめざして」（大西 亘）
・「博物館ちょこっと体験コーナー」（教育専門員 菅 尚子・加藤 友里江・柴田 美奈子・竹澤 美貴・丹野 利子）
・「植物収蔵資料のデジタル画像化」
（資料取扱員 熊谷 拓朗）
・「阿部光典ゲンゴロウ類コレクションのデジタル画像化」（資料取扱員 佐野 真吾）
・「相模湾西部の海底地質調査報告」（山下 浩之）

Vol.19, No.2 通巻73号（2013年6月15日発行）
・表紙「サクラダイ」（瀬能 宏）
・「スズメバチのあれこれ」（渡辺 恭平）
・「日本の原色魚類図鑑」（瀬能 宏）
・「相模湾沿岸の津波堆積物の調査」（神奈川県温泉地学研究所 金 幸隆）

Vol.19, No.3 通巻74号（2013年9月15日発行）
・表紙「深海の造形の砂 渦巻く溶岩 ハイパードルフィンにて撮影」（KO-OHO-Oの会 藤岡 換太郎）
・「美味しい食べ物を作るカビ～味噌蔵見学記～」（大坪 奏）
・「相模湾のバイオ・ジオ・ダイバーシティ～KO-OHO-O航海の成果～」（KO-OHO-Oの会 藤岡 換太郎）
・ライブラリー通信「海辺の漂着物ハンドブック」（小林 瑞穂）
・「博物館で、研究者なりきり体験～海洋コアを食べよう！～」（石浜 佐栄子）

Vol.19, No.4 通巻75号（2013年12月15日発行）
・表紙「相模湾に現れたゴマフアザラシ」
（新江ノ島水族館 崎山 直夫）
・「骨の形から読み解く脊椎動物の進化」（松本 涼子）
・「多様性展示が新しくなりました！」（大西 亘）
・「ナンヨウボウズハゼ属の雌を水中で見分けよう」（魚類ボランティア 熊澤 伸宏）
・ライブラリー通信「ある日のレファレンス記録」（新山 直子）
・「アンデスを越えて―パタゴニアの火山地質調査―」（平田 大二）

Vol.20, No.1 通巻76号（2014年3月15日発行）
・表紙「ヒオウギ」（田口 公則）
・「鮮やかなヒオウギを配列して魅せる」（田口 公則）
・「鯨？海豚？河馬？海豚河馬？～鯨偶蹄目ってなんだ？！」（大島 光春）
・「奥村定一昆虫コレクション －古い標本が語ってくれることー」（苅部 治紀・元非常勤学芸員 川島 逸郎）
・ライブラリー通信「科学しかけえほん」（小林 瑞穂）
・「イルカの前肢で見えてくるもの」（樽 創）

Vol.20, No.2 通巻77号（2014年6月15日発行）
・表紙「日本にもあるよ！大きな板根 ホルトノキ」（大西 亘）
・「名倉コレクション-ある貝類愛好家と貝類を取り巻く人びととの交流の証-」（佐藤 武宏）
・「タマムシをさがしてみよう！」（渡辺 恭平）
・特別展コラム「外来生物ってなんだろう」（加藤 ゆき）
／ライブラリー通信「全国博物館縦断！図録の旅」（新山 直子）
・「日本初記録の絶滅した淡水生爬虫類（コリストデラ類）の化石」（松本 涼子）

Vol.20, No.3 通巻78号（2014年12月15日発行）
・表紙「箱根火山最大級の噴火の痕跡」（笠間 友博）
・「アメリカ西部の自然系博物館を訪ねて」（大島 光春）
・「消えたアカトンボ」（苅部 治紀）
・企画展「恐竜の玉手箱」
／ライブラリー通信「司書のお仕事 修理編」（小林 瑞穂）
・「自然史資料としての地層剥ぎ取り標本」（石浜 佐栄子）
・「ケンペルが採集した植物標本」（田中 徳久）

Vol.21, No.1 通巻79号（2015年6月15日発行）
・表紙「黄金色のヒラメ」（新江ノ島水族館 岩崎 猛朗）
・「生命の星・地球博物館における資料収集と評価の視点」（瀬能 宏）
・「博物館にまつわる数字（2）」（大島 光春）
・「地層の『剥ぎ取り』と『型取り』」（石浜 佐栄子）
・「湯河原が誇る石材"白丁場石"」（山下 浩之）
・ライブラリー通信「本の住所」（堀尾 璃紗）

Vol.21, No.2 通巻80号（2015年9月15日発行）
・表紙「フォッサマグナ発祥の地」（館長 平田 大二）
・「WEB上の生物多様性情報を自然史研究に役立てる」（日本学術振興会特別研究員PD 宮崎 佑介）
・「オーストラリア南東部の自然系博物館を訪ねて」（大島 光春）
・「花粉熱―花粉症を初めて紹介した記録」（大坪 奏）
・「アメリカからやってきた河川地形の実験模型」（石浜 佐栄子）
・ライブラリー通信「ぎふちょう」（小林 瑞穂）

Vol.21, No.3 通巻81号（2015年12月15日発行）
・表紙「ダイオウホタルイカモドキ」（佐藤 武宏）
・「スゲ属植物が作る『坊主たち』」（勝山 輝男）
・「ミニ企画展『いきもの探偵』を終えて」（IP-egg 藤田 和宏）
・「きのこの標本・ 学名よもやま話」（折原 貴道）
・「サヴァチェが神奈川県で採集した植物標本」（田中 徳久）
・ライブラリー通信「LOVE! キュッパ」（堀尾 璃紗）

Vol.22, No.1 通巻82号（2016年3月15日発行）
・表紙「シカによる過度の採食で変わり果てた森林」（渡辺 恭平）
・「ぬいぐるみ脳？抱っこ剥製？ ―「教材標本」の活用について―」（広谷 浩子）
・「どこから見たのか？ BAY OF WODAWARA」（新井田 秀一・瀬能 宏）
・「段丘地形を利用した酒匂川の水力発電 ～人と地質学の接点～」（田口 公則）
・「博物館のデジタルアーカイブ」（大西 亘）
・ライブラリー通信「司書のお仕事 蔵書点検編」（小林 瑞穂）

Vol.22, No.2 通巻83号（2016年6月15日発行）
・表紙「ダイヤモンド」（山下 浩之）
・「魅せる特別展『Minerals in the Earth ―大地からの贈り物―』」（山下 浩之）
・「根絶なるか？特定外来生物カナダガン」（加藤 ゆき）
・「小田原城 御用米曲輪の地層と天守閣の位置」（笠間 友博）
・「恐竜時代へのタイムトンネル ～桑島化石壁（手取層群桑島層）～」（松本 涼子）
・ライブラリー通信「ヒメハルゼミ（姫春蝉）の名付親・谷 貞子を探して」（土屋 定夫）

Vol.22, No.3 通巻84号（2016年9月15日発行）
・表紙「ムネアカハラビロカマキリ」（苅部 治紀）
・「新種は収蔵庫からも見つかる ～標本調査の楽しみ～」（渡辺 恭平）
・「神奈川県の帰化植物率の変遷と分布」（田中 徳久）
・「植物の名前、どうやって調べる？」（大西 亘）
・ライブラリー通信「保育社の原色図鑑のお引越し」（小林 瑞穂）

Vol.22, No.4 通巻85号（2016年12月15日発行）
・表紙「関東地震で動いた巨石－久野石の石切場跡－」（田口 公則）
・「2016年度企画展『石展2－かながわの大地が生み出した石材－』」（山下 浩之）
・「どこ生まれのマンモスゾウ！？」（樽 創）
・「高校と博物館の連携事例」（神奈川県立吉田島総合高等学校 髙橋 晋太郎）
・「展示見学ポートフォリオづくりの講座実践」（田口 公則）
・ライブラリー通信「楽しいけれど、一筋縄ではいかない非流通資料の収集」（土屋 定夫）

Vol.23, No.1 通巻86号（2017年3月15日発行）
・表紙「モンガラカワハギ」（新江ノ島水族館 樋口 理紗・当館学芸員 瀬能 宏）
・「データベースに登録された維管束植物の標本数が30万点に達しました」（田中 徳久）
・「砂の性質を使ったおもちゃ」（石浜 佐栄子）
・「『始祖鳥展～科学か芸術か』の紙上展示」（大島 光春）
・ライブラリー通信「ビデオブースが書庫になりました」（小林 瑞穂）

Vol.23, No.2 通巻87号（2017年6月20日発行）
・表紙「地球を『はぎ取る』」（石浜 佐栄子）
・「特別展 地球を『はぎ取る』～地層が伝える大地の記憶～」（石浜 佐栄子）
・「菌類の調査、いっしょにやりませんか？―市民参加型の生き物調査の取り組み」（折原 貴道）
・「街中に残された哺乳類の貴重なすみか―河川敷―」（鈴木 聡）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌① 開高 健の巻」（土屋 定夫）

Vol.23, No.3 通巻88号（2017年9月15日発行）
・表紙「ムラソイの黄化個体」（瀬能 宏）
・「地域自然史博物館のデジタル・アーカイブ - 概要 -」（大西 亘）
・「ヒアリってどんなアリ？ ―正しく恐れよう外来アリたち―」（苅部 治紀）
・「県の石」（山下 浩之）
・「日本の海の自然を詰め込んだ箱庭・相模湾」（佐藤 武宏）
・ライブラリー通信「箱根のガイドブック」（小林 瑞穂）

Vol.23, No.4 通巻89号（2017年12月15日発行）
・表紙「トキ」（加藤 ゆき）
・「神奈川県レッドデータブック 2回目の改訂に向けて」（加藤 ゆき）
・「"地層バイキング"特別展「地球を『はぎ取る』」ワークショップ報告」（笠間 友博）
・「作って、読み解く"お天気のしましま" 特別展「地球を『はぎ取る』」で作った114日間の地層」（石浜 佐栄子）
・「維管束植物標本の特筆すべきコレクション」（田中 徳久）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌② 正岡 子規の巻」（土屋 定夫）

Vol.24, No.1 通巻90号（2018年3月15日発行）
・表紙「宇宙から見た東京～神奈川」（新井田 秀一）
・「古民家で暮らすハチたちを調べて」（渡辺 恭平）
・「地域自然史博物館のデジタルアーカイブが目指すもの」（大西 亘）
・「大型冷凍庫リニューアル ～「大整理」から得た指針とは？～」（広谷 浩子）
・展示シリーズ21「レインボーアンモナイト」（田口 公則）
・ライブラリー通信「楽しいきのこの世界」（小林 瑞穂）

Vol.24, No.2 通巻91号（2018年6月20日発行）
・表紙「マグソクワガタ」（苅部 治紀）
・「『神奈川県植物誌2018』～40年間の植物誌調査の成果～」（田中 徳久）
・「小さな化石の大きな発見～東アジア初の両生類アルバノペトン科の報告～」（松本 涼子）
・「ドイツ南部とウィーン自然史博物館を訪ねて」（大島 光春）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌③ 上村 淳之の巻」（土屋 定夫）

Vol.24, No.3 通巻92号（2018年9月15日発行）
・表紙「眠るツノトンボ」（渡辺 恭平）
・「特別展「植物誌をつくろう！～『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから～」の見どころ＋α」（大西 亘）
・「火山ジオパークと共に見てほしいプリニー式噴火の軽石層」（笠間 友博）
・「たくさん標本を集め、哺乳類の変異を研究し、普及する」（鈴木 聡）
・ライブラリー通信「骨格百科－スケルトンーその凄い形と機能」（小林 瑞穂）

Vol.24, No.4 通巻93号（2018年12月15日発行）
・表紙「ホソスゲ」（勝山 輝男）
・「両生・爬虫類の標本工房」（松本 涼子）
・「日本に初めて打ち上げられたシロナガスクジラ」（当館学芸員 樽 創, 新江ノ島水族館 崎山 直夫, 当館学芸員 鈴木 聡, 国立科学博物館 田島 木綿子）
・「学芸員と標本士－鳥獣標本を継承する2つの人材－」（広谷 浩子）
・「博物館の来館者数を考える－入館者700万人を迎えて－」（田口 公則）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌④ 遠藤 周作の巻」（土屋 定夫）

Vol.25, No.1 通巻94号（2019年3月15日発行）
・表紙「オーストンガニ」（佐藤 武宏）
・「どれだけ必要？～資料のコレクションポリシーと収蔵庫～」（瀬能 宏）
・「岩石薄片を簡単につくり観察する」（山下 浩之）
・「『神奈川県昆虫誌2018』ができました」（渡辺 恭平, 苅部 治紀）
・ライブラリー通信「リアルサイズ古生物図鑑 古生代編」（小林 瑞穂）

Vol.25, No.2 通巻95号（2019年6月15日発行）
・表紙「2018臺中世界花卉博覧會（2018 台中フローラ世界博覧会）」（田中 徳久）
・「アオバトのふしぎ」（加藤 ゆき）
・「東アジアで初めて見つかった絶滅真無盲腸類の新種」（大島 光春）
・「神奈川県におけるムネアカハラビロカマキリの拡散状況とその移入経路」（苅部 治紀）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌⑤ 岡本太郎の巻 太陽の塔はカラスだった？！」（土屋 定夫）

Vol.25, No.3 通巻96号（2019年9月15日発行）
・表紙「アオゾメクロツブタケ」（折原 貴道）
・「アオバトの足元にも注目！～照ヶ崎海岸周辺の地質・地形紹介～」（石浜 佐栄子）
・「キアシドクガの大発生顛末記」（相模原市立博物館 学芸員 秋山 幸也）
・「学芸活動に基づく自然史系博物館の事業評価に必要な視点」（瀬能 宏）
・ライブラリー通信「鳥類学者の目のツケドコロ」（小林 瑞穂）

Vol.25, No.4 通巻97号（2019年12月15日発行）
・表紙「擬態するヤモリ」（松本 涼子）
・「電子百科：宇宙から見た日本の衛星画像の紹介」（新井田 秀一）
・「大磯町西小磯海岸の"石切り場"跡の探究」（田口 公則）
・「スマートフォン用マクロレンズで冬芽観察をしよう！」（大西 亘）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌⑥ ゲーテの巻 ゲーテの趣味は石集めだった？！」（土屋 定夫）

Vol.26, No.1 通巻98号（2020年3月15日発行）
・表紙「サフィリン金雲母岩」（山下 浩之）
・「大陸の誕生と分裂をさぐる」（山下 浩之）
・「復元図を起こす」（樽 創）
・「広域テフラについて」（西澤 文勝）
・ライブラリー通信「専門図書館探訪」（小林 瑞穂）

Vol.26, No.2 通巻99号（2020年6月25日発行）
・表紙「恐怖の外来種 クビアカツヤカミキリ」（渡辺 恭平）
・「カンボジアの水生昆虫調査」（苅部 治紀）
・「哺乳類の性的二型：イタチとゾウアザラシの意外な共通点」（鈴木 聡）
・「フレキシブルなダケカンバ」（石田 祐子）
・ライブラリー通信「文人たちの博物誌⑦ 小松 左京の巻 日本を沈めた男の生物学はSFではなかった！？」（土屋 定夫）

催し物のご案内

企画展「ゴンドワナ～岩石が語る大陸の衝突と分裂～」

開催期間／2月29日（土）～11月8日（日）※会期を延長して開催しています。
観覧料金／無料（常設展は別料金）

大陸は、プレートの運動によって集まっては分裂して現在の姿となったことがわかってきており、大陸移動の履歴はおよそ10億年前までは詳細にさかのぼることができます。

今回は、およそ6億年前に南半球に存在した、現在のアフリカ、南アメリカ、インド、オーストラリア、南極のもととなった「ゴンドワナ大陸」に焦点をあて、巨大な大陸はどのようにして生まれ、分裂したのか。その謎解きを岩石や鉱物、化石を通して行います。また、日本ではなじみの薄いゴンドワナ大陸で誕生した生物たちも紹介します。

●「植物図鑑の使い方～樹木編～」［博物館］
日時／10月17日（土）10:00～15:00
小学4年生～成人 15人
※小学4年～6年生は保護者の付添必須、
その場合は幼児連れ可
申込締切／10月6日（火）必着

●「あなたのパソコンで地形を見る」［博物館］
日時／10月18日（日）10:00～15:00 成人 6人
申込締切／10月6日（火）必着

●「博物館で『せいめいのれきし』を楽しむ～絵本片手にワークショップ～」［博物館］
日時／11月3日（火・祝）10:30～15:30
成人・教員 10人
申込締切／10月20日（火）必着

〔催し物への参加申込について〕
講座名・開催日・代表者の住所・電話番号・申込者全員の氏名・年齢（学年）を明記の上、往復はがきにて当館住所まで郵送、またはウェブサイトからお申込ください。応募者多数の場合は抽選となります。抽選で落選した方に対し、キャンセル待ちの対応を行ないます。ご希望の方は、お申込時に、その旨をご記入ください。参加費は無料ですが、講座により傷害保険（1日50円／1人）への加入をお願いすることがあります。

●「秋の地形地質観察会～神奈川県鳥瞰図スペシャル～」［博物館および小田原周辺］
日時／11月7日（土）10:00～15:00 ※雨天中止
中学生～成人 20人
申込締切／10月27日（火）必着

●「野生動物の自動撮影入門」［博物館および小田原市（国府津）］
日時／11月7日（土）・15日（日）10:00～15:00 ※荒天中止
小学生～成人 10人
※小学生は保護者参加必須、
2日間の参加が条件です。
申込締切／10月27日（火）必着

●「先生のための地層と化石入門～七沢石のふるさとを巡る～」［博物館および厚木市（七沢）］
日時／11月28日（土）・29日（日）10:00～16:30
教員 10人 ※2日間の参加が条件です。
申込締切／11月17日（火）必着

以降の講座については、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を考慮した上で開催の可否を決定いたします。また、募集中の講座についても状況により中止となることがありますので、あらかじめご承知おきください。最新情報は、当館公式ウェブサイトをご確認くださいますようお願いいたします。

ライブラリー通信 世界を変えた100の化石

小林 瑞穂（こばやし みずほ）（司書）

大変めでたいことに、今号で『自然科学のとびら』が通巻100号を迎えましたので、今回はライブラリー通信でも「100」に因（ちな）んだ本を紹介しようと思います。

『世界を変えた100の化石』は、原題の" A history of life in 100 fossils " の名の通り、大英自然史博物館所蔵の標本をメインに、先カンブリア紀から新生代までの、生命史における重要な節目となる化石を厳選して100点紹介した本です。掲載されている化石は、古いものから新しいものへと年代順に並んでおり、ページをめくるごとに生命史をたどることができるようになっています。見開きページに化石の写真とその解説という実にシンプルな構成なのですが、なかなかに読み応えがあります。

エクスナレッジ 2018年

まず目を引くのは化石の緻密で美しい写真です。近年の写真・印刷技術はすごいですね。細かな凹凸や色彩の濃淡（のうたん）など、細部までくっきりと見て取れます。解説文には発掘された時の経緯や、どういった種類の化石なのか、その化石が生きていた当時はどんな環境だったのか等、興味深い情報が満載で、楽しく読める一冊となっています。

当館では新型コロナウイルス感染症の拡大を防止し、来館者の皆さまの安全確保に努めるため、感染症拡大予防対策を実施しています。各種の制限により、ご不便をお掛けすることになりますが、何卒、ご理解とご協力をお願いいたします。

［公式ウェブサイト］
http://nh.kanagawa-museum.jp/

［公式Twitter］
@seimeinohoshiPR

自然科学のとびら
第26巻3号（通巻100号）
2020年9月15日発行
発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 平田大二
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
Tel: 0465-21-1515 Fax: 0465-23-8846
編 集 本杉 弥生（企画普及課）
印 刷 株式会社あしがら印刷

© 2020 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.